

【森林保全部門】

高知中部森林管理署における獣害対策の検証と今後の取組

高知中部森林管理署 主任森林整備官 原崎 万実子
業務グループ係員 ○大山 秀太

1 課題を取り上げた背景

高知中部署管内は、ニホンジカの生息密度が高く、急峻な地形も相まって再造林が難しくなっています。このことから、高知中部署では、これまで獣害対策に関する様々な研究課題に取り組んできました。

これらの取組のうち、令和3年度から令和5年度の研究課題について、簡潔に説明し、令和7年度実施の再造林事業にどのように活用したか紹介します。



(写真1：食害により下層植生が衰退し林地崩壊を招いた単木保護施工箇所)

2 各研究課題の概要

(1) 地形を活かしたニホンジカ防護柵設置の取組（令和3年度）

防護柵補修の主な要因は、野生動物の絡まりと落石等による破損となっており、維持管理に時間と労力がかかっています。そこで、画一的な施工ではなく地形に応じた防護柵設置を検討しました。その結果、保護樹帯を利用した施工で、落石等による破損の減少及び耐風性が向上しました。また、網目7cmの高強度繊維入りネットを採用したことで、野生生物の絡まりによる破損が減少しました。

(2) 単木保護の効果的な設置の取組（令和4年度）

急峻な地形では防護柵設置が困難なため、単木保護を施工しましたが、資材の高さ不足や資材接合部の破損によって食害が発生しました。試験の結果、資材の高さを180cmにかさ上げし、接合部のない資材を使用することで、食害を防止できることがわかりました。また、林地保全のためには

単木保護による植栽木の保護だけでなく、下層植生の保護が重要と感じました。

(3) 単木保護施工箇所におけるニホンジカ侵入の抑制について（令和5年度）

単木保護施工箇所の追加コストを抑えた再造林と、下層植生の保護、林地保全を目的に調査を行いました。試験の結果、平地における試験ではロープ等の高さ30cm～60cmの間でニホンジカの侵入が多く見られ、高さ90cm以上からの飛び込みは見られませんでした。ただし、急傾斜地では傾斜が一定ではないことから、侵入防止効果が低いことがわかりました。

3 現在の取組

令和3年度研究結果より、事業区域外縁部の防護柵について、支柱の代わりに立木を利用し、資材費の削減と支柱折損による補修の負担の軽減を図りました。また、落石による破損が予想される事業区域下部（林道沿い）に金属製の防護柵を設置し、維持管理の負担軽減を図りました。令和4年度研究結果より、接合部のないネットタイプ単木保護（高さ170cm）を設置しました。令和5年度研究結果より、一部区域において高さ1.0mと1.8mの防護柵をそれぞれ施工し、効果の比較を行っています。



(写真2：支柱の代わりに立木を利用したネットの施工箇所)

4 今後の取組と考察

上記3以外にも、LED光と高周波を発生させる赤外線センサー付き害獣撃退装置を試験的に設置し、観察・記録を行っています。今後も過去の研究結果と新たな技術を駆使しながら、コストを抑えた再造林事業に取り組みたいと考えています。